「母子通園」の呼称は、残して欲しい

就学前の障害のある子どもの支援策の一つとして、児童デイサービス事業（心身障害児通園施設）がある。

４０年程前に我々が支援して開設した頃は「マザーズ・ホーム」と呼称され、後に法整備で「母子通園施設」と呼称されていた施設種である。

私は、母子通園施設の最大のメリットを次のように考えている。

「親は障害のある我が子の育児に戸惑い、不安を抱いているだけに、子どもを預ける保育所・幼稚園と異なり、子どもとの付き合い方を親が学ぶことが出来る。

スタッフは、子どもとの付き合い方の見本を親に見せ、伝えることである。」

母親にもスタッフにもこの最大のメリットを強く意識して活かして欲しく、敢えて「母子通園」という呼称は残して欲しいと思っている。

「男女共同参画の今の時代に、なぜ、母子通園の呼称か？」という論があろうが、乳幼児期の子どもは、やはり「オ母サン（HP「雑学 BN」のメル友・コメント等関係（Ⅳ）、2007.06.12.「なぜ『オ母サン』という書き方をするのですか？」：参照）」を求めている。

この件で、ある母子通園施設に保育士として勤務した経験のあるメル友に意見を求めたら、次のような返信をいただいた。

【　母子通園では、なぜ、こどもと母親が一緒に通っていくるのかということですよね。

母親のサポートも大切な目的ですが、一緒に遊ぶことで、こどもと一緒に過ごす時間が楽しいと思える時間を増やしていく。

母子通園で親子で体験したことを家庭でも行い、楽しさを膨らませていくお手伝いをする。

そうする中で、母親は自信をつけていく。自信がつけば、もっと楽しい思い出が作れる。そういうことが大切だと思います。

母子通園に来るお母さんは、通い始めた時、落ち込んだ気持ちで来るものです。そういう時には、なかなか、こどもと一緒に過ごす楽しさを感じられない状況。

でも、そんな時に、誰かが側にて、気持ちを後押ししてくれる、それが、母子通園のスタッフのように思います。

一人では歩き出せないけど、誰かと一緒だったら歩き出せる、そして、一歩踏み出し、そのうち、時々誰かに頼りつつも、一人で歩き始める。

その時期は、お母さん、一人一人で違いますが、その気持ちに寄り添うのが大切だと思います。　】

阿部幸泰　　（2008 年 10 月 5 日　記）